

■マルティナBF敗北記

世界には各地に闘技場が存在する。時には二対二のタッグマッチで、時には仮面をつけ正体を隠して……様々なルールで闘士たちが激突し、切磋琢磨し、血わき肉踊る戦いに客は興奮する。

だが、とある町の地下闘技場……そこには表舞台のどの闘技場よりも客をヒートアップさせていた。

そこでは非合法だからこそできる戦い『淫闘』……性戯の勝負が繰り広げられる。

男女が互いに快感を与え合い、絶頂させ合う。それは闘う者と見る者を、常通の格闘・戦闘より強く激しく興奮させるのだ。

そんな闘技場……いや、淫闘場において、頭一つ抜けた強さと魅力を持つ者がいた。

それは抜群のスタイルを誇る美女。圧倒的なフェロモンで対峙する者を即座に発情させ、並みの男であれば触れただけで果てさせるとまで噂される最上級のテクニックも併せ持つ。

全ての男を屈服させる孤高の存在を、淫闘場の者たちは『女王』と呼び、恐れ敬っていた……

『女王、胸で肉棒を捕えた！ そして即射精——！ ぱふぱふが決まった——！』

今、リングの上で戦う女性……妖艶な黒のバニースーツで彩ったポニーテールの美女、マルティナ。

彼女こそ、この淫闘場の頂点に君臨する女王その人である。

元は一介の闘士として旅を続けていたのだが……試しに覚えたお色気スキル。それがきっかけで性に興味を持ち、出来心で参加した淫闘に圧勝。

デビュー戦で圧勝を飾ったことにより、男をそれまでの自慢だった豪脚ではなく色香と性戯で倒す快感に目覚め……

……気付けば、この淫闘場で頂点の存在となっていた。

女王は挑戦者の男を追い詰めると、メロンのように大きく瑞々しい胸で責める。

相手の身体の一部を爆乳で挟む技、通称『ぱふぱふ』。ただでさえ男にとっては夢の行為だが、マルティナのそれはまた格別。

対戦相手は相当な実力者……即ち人一倍の精力を誇るはずなのだが、技をかけた瞬間に射精。女王の柔らかくも弾力に富んだ乳肉の威力に耐え切れなかったのだ。

司会者が会場を盛り上げる間にも女王は連続で責める。男をロープ際まで追い詰めると、素早く反転。

胸に負けず劣らず肉の実った尻で、射精したばかりの肉棒に押し潰す。

『そしてヒップアタック！ またも女王の最強コンボに挑戦者が破れるのか——！』

ただ肉棒の裏筋に押し付けるだけでなく、尻を揺さぶり刺激を与える尻コキ責め。

爆尻と呼んでいい量感の激しい腰つきはもはや打撃といっても差し支えない迫力だ。それでいて痛みはなく、男は強烈な快楽衝撃のみを与えられる。

この技がまともに決まって耐えられた男は存在しない。

今回の挑戦者も試合開始時は不敵な笑みを浮かべていたが、今は快楽と屈辱に染まって蕩けた眼をしている。手で尻を跳ねのけることすらできず、情けない小さな呻き声を上げ——

ドブ♥ ドピュッ♥ ビュルルルルルッ♥

『またも射精——！ そして……続行不可能！ またも挑戦者破れる！ 女王の勝利！ 連勝記録更新です！』

弱々しく肉棒が脈打ち、水のような精液が漏れる。挑戦者が射精するのはこれで五度目。最初は濃厚な雄汁を噴いていたのだが、今やこの有り様だ。もっとも、短時間で五度も射精できるあたり、やはりこの男も性豪なのだが……それでもマルティナの責めには全くついていけなかった。

そして遂に打ち止め。ほぼ失神し、レフェリーに続行の意思を見せることができず敗北となった。

「あら、もう終わりなの？ ふふっ、次はもっと頑張ってくださいね♪」

男を五回も果てさせておいて、自身は一度も達していない女王マルティナ。余裕の笑みを浮かべ、相手を挑発するが無論、相手には聞こえていない。

それどころか、この男が淫闘場に戻ることは二度と来ないかもしれない。というのもマルティナが本気で技を出せば、男はたちまち精力を搾り取られ、再起不能になることもあるのだ。

『今回も女王の完勝！ 果たして彼女を打ち倒し、連勝記録を止める男は現れるのか——！』

司会が実力を的確に表現し、観客もマルティナの淫闘に熱狂している。そうやって讃えられると、マルティナとしても気分が良い。むしろ更なる強敵を欲してしまうくらいだ。

(今日の相手、少しは粘ったけど……これじゃ、勝負にならないわね♪ もっと手応えのある男はいないのかしら……)

より強い、より嫩り甲斐のある男はいないものか。

そんな彼女の元に、ある男が挑戦してきた。何でも他の淫闘場で無敵の性豪との噂で、自分の相手になる女を探していたのだとか。

更に、マルティナと同じく闘士から淫闘者に転職し、相当の実力を付けたビビアン、サイデリアのお色気コンビを同時に墮として孕ませた……などという話も足される。

「へえ……面白そうじゃない。もちろん受けるわ。無敵の性豪を大勢の前で搾り尽くす……次の試合、少しは楽しめそうね♪」

大層な噂を聞くと、逆に興奮してしまう。

相手の強さ、そしてそれを打ち負かす未来をを想像すると、舌なめずりして嗜虐的な笑みを浮かべるマルティナであった……

◆

——噂の性豪との試合開始 直前。

ロープが張られたリングの上で、マルティナは初めて対戦相手の姿を見る。

「あら……こんなに小さな子だったのね」

筋骨隆々な大男、恰幅のいい中年……性豪としてのステレオタイプなイメージを抱いていたマルティナは、挑戦者が想像以上に小さく若い男子であったことに驚く。

【よろしくお願ひします】

「ええ、よろしく♪ お互い正々堂々 闘いましょう♪」

(これは……期待外れかもしれないわね。……っ?！)

挨拶時も、マルティナのバニースーツゆえに露出した大きな谷間を見ってくる。いかにも典型的に無邪気な少年といった感じの対戦相手。

これは噂に付き纏った尾ひれに騙されたか……そう思ったマルティナだが、少年が衣服を脱いで下着一枚になった瞬間、眼を見開く。

そこには少年の体格と風貌には全く不釣り合いな肉棒が備わっていた。まだ勃起していないにも関わらず布を押し上げて存在感を主張するそれは、今まで戦ったどの男よりも大きい。

まさに巨根と呼ぶに相応しい肉幹。それを見て、マルティナは一気に精神が昂ぶってくる。

(デカいっ……！ これよ、こういうのを待ってたのよ！)

男の実力は傍目には測れない、というのを改めて認識する。最近の試合に満足しきれていないこともあり、否応にも期待が膨れる。

あの巨根はどれだけ耐えてくれるのか。どれだけ快感を与えてくれるのか。天性の嗜虐性を奮わせ……

『片や当淫闘場最強の女王！ 片や見た目に寄らず凄まじい巨根の挑戦者！ 果たして勝つのはどちらか?!』

それでは……試合開始!』

開始の合図と同時に、跳び込んで急接近。元一流の闘士ならではの素早さで相手頭部をロックし、自らの胸に押し付ける。

『ぱふぱふが早くも決まった——！ 挑戦者の小さな頭が、マルティナの爆乳に沈み込む——!』

爆乳責め……ぱふぱふを仕掛け、それを起点に一方向的に試合を展開する。胸に見惚れる相手に対する必勝パターンだ。

バニースーツが食い込み、柔らかな量感を魅せる胸乳は男に得も言われぬ恍惚感を与える。ただ顔を押し当ててやるだけで、大抵の男は腰砕けとなるのだが……

「っ!」

しかし、少年はその状態から反撃。胸を押し付けられながらも舌を伸ばし、巧みにスーツを掻い潜って乳首を探し当てると、そこを舌先でくすぐってきた。

肉棒と同じく、舌技は今までの男とは比にならない。細やかな震動を乳首に当てられ、確かな快感を送ってくる。すぐさま乳首が勃起し、性快楽を感じさせられたことを悟られる。

しかし、そこで少年が離れる。マルティナが頭を掴んでいた手を離し、肉棒に向けたからだ。再び間合いが広

がり、両者睨み合う。

『おおっと、ここで女王が更にペニスを責めようとしたところで挑戦者離れた！ 手コキを嫌ったか……しかし女王も片方の乳首が見えている！ 挑戦者に舌に、あの女王が早くも感じたのか——?!』

(ふふ……そうこなくちゃ♪)

マルティナとしては、早くあの巨根を自慢の肉壺で味わいたい。だが、やっぱり早漏でした、では意味がない。よって、まずは胸を使った責めで小手調べしたが……初見であれだけ反撃できるとはなかなかのものだ。実力を内心評価すると、今度は少年が仕掛けてくる。接近し、胸を狙う……と見せ、回り込みバックを取りに来る。

(甘いわっ!)

少年がマルティナの後ろに回り込み……責めようとした絶妙のタイミングでヒップアタック。爆尻の割れ目に巨根を挟み、押し潰す。

「あはっ♪ 見回目通り、ガッチガチね♪」

『回り込まれ……ここでヒップアタックだ！ 早くも勝負が決まるか——!』

マルティナの爆尻が少年を捉えるのを見て、観客と司会は勝利を確信する。後ろに回り込んだ男は、ほとんどこの尻コキ……ヒップアタックで沈んでいるからだ。今も尻肉を揺らす腰使いと臀部の圧力で下着をズラし、その肉幹を露出させる。生のペニスを刺激し、一見マルティナが有利だ。

しかし……

「やだ、こんなに大きいなんて……それに、なんて熱さなの？ 火傷しちゃいそう……こんなスゴいオチンポは初めてだわっ♪」

露出させ、触れることで、眼にしなくともその大きさと形状が伝わってくる。硬く反り立った肉幹はまさしく女殺し。マルティナの尻でも包みきれない巨大さ、そして灼けるよう熱感に、言葉責めも兼ねているとはいえ賞賛をかけてしまう。

しかも少年はヒップアタックを喰らいながらも、それを愉んでいるようだ。むっちりとした尻を掴み、威力を抑えるとそのまま少年のペースで動かしてくる。

『これは……挑戦者、尻コキを愉んでいる？ 自ら尻を掴んで女王に尻コキさせている!』

【お褒めに預かり光栄、ってどこですかね？ こちらこそ、こんなに気持ち良いお尻は初めてなんで……愉ませてもらいますよっ!】

ずりゅっ! ずりゅりゅっ!

「私のヒップアタックを捕るなんて流石ねっ♥ でもこれじゃ、私にダメージはほとんどないわよっ?」

マルティナの責めを凌いだように見えるが、これではペニスへの衝撃を抑えただけだ。肉幹からマルティナへの感触は心地よいもののダメージとはならない。まだ有利な状況に、マルティナが更に腰の動きを速めるが……

そこで、巨根が爆尻を潜り込んだ。

「なっ？ いつのまに……」

ずりゆりゆっ！

「ああっ♥」

尻コキから逃れた巨根。それがマルティナの股間に当てられ、素股としてこちらを責めてきた。肉竿が秘裂と陰核に密着し、その硬度と反りで擦り上げる。

「あんっ♥ やるじゃないっ！ こんなガッチガチの、熱ういデカチン♥ こんなもので擦られたら、並みのマンコじゃ即墮ちするでしょうねっ！♥」

感じながら、マルティナの方も相手の責めを愉しむ。快感は与えられるが、充分 許容範囲。むしろこちらから動きを速める。

「でも私には物足りないわっ♥」

ずりゆっ！ ずりゆんっ！

責めているはずの肉竿を、逆に擦っていく。

相手に与えるダメージもまだ大きくはないが、確実に射精は近付いているはずだ。ヒクヒクと小さく脈打ち、巨大なカリ首が上下している。

「どうしたのっ？ まさかもう終わりなんてことはないわよねっ♥」

挑発を受けてか、少年が尻を離す。マルティナの胸と股間に手を伸ばし――

「来なさい♥ あなたのテク、もっと見せ――」

びいんっ！

「うあっ?!♥♥」

その時、乳首と陰核を十……いや、数十の刺激が覆った。刺激の一つ一つは小さいものの、女の扱いを熟知した柔らかで絶妙な加減であり、それらを一気に与えられたことでマルティナは嬌声を弾けさせる。

『素股の攻防は互角か？ だが少年が手を伸ばした瞬間、女王が喘ぐ！ まさか今の一瞬で愛撫したのか――?!』

(今は……愛撫なの？ そんな、見えないなんて……！)

元闘士のマルティナは身体能力にも自信がある。実際、開幕時には少年に先手を取り、回り込まれた時もヒップアタックで的確に反撃した。

少年には身体的に有利なはずだが……指の動きだけは、マルティナにも知覚できないほど素早い速度だということのか。

『マルティナ、ヒザが崩れ……』

巨根に気を取られていたのもあり、予想外の攻撃。これには強い快感ダメージを負い、体勢を崩されるが……

「——なんてね♪」

【うっ?!】

『——と、ここで倒れ込みパイズリ！ 再びぱふぱふが挑戦者を襲う！』

ダウンしたと見せかけ、くるりと反転しつつ屈むことで、少年の肉棒を捕らえる。顔ではなく性器を直接刺激する。一部のファンが『真のぱふぱふ』などと呼ぶ、最大の爆乳攻撃だ。

「愉しまれてくれたお礼よ♪ 少し本気になってあげるわっ♥」

じゅっふ♥ ずりゅりゅっ♥

【っ！ これは、なかなか……】

凄まじい乳圧で巨根を按摩し、迫力と存在感で以って扱き上げる。これには少年も呻き声を出し、勢いに乗って責め続ける。

じゅぶっ♥ じゅぶっ♥ じゅぶっ♥ じゅぶっ♥

「どう、この圧力？ 我慢せずイッていいのよ♥」

【いやいや、こんな気持ち良いパイズリ、もっと愉しまないとっ……！】

子をあやすような甘い声と共にウィンクを投げる。この色目使いはサキュバスウィンクと呼ばれ、マルティナの妖艶な視線を浴びたものは、たちまち絶頂するのだが……少年の肉根は昂ぶりこそすれ、まだ余裕があるようだ。

(流石にしぶといわね……でも、いつまで耐えられるかしら?)

じゅぶんっ♥ じゅぶるるんっ♥

【おお……っ！】

『更にフェラ責めも追加される！ 女王の唾液と唇が挑戦者に絡み付く——！』

唇と舌、唾液と吐息を使って更に与える快感を増加させる。

マルティナにここまで責めさせた男は、そうはいない。この責めで射精しなかった男となればほぼ皆無だ。

胸で扱き、唇で啣え、舌を鈴口とカりに絡ませ、唾液をまぶして時折 不意を突くように吐息をかける。

ここまですれば大抵の男は堪えきれずに達するが……少年はまだ追い詰められている気配がない。

(それにしても、このチンポ……！ 本当にスゴいわ♥ こんなに責めてるのに、まだピンピンっ♥)

むしろマルティナの方が、その精力に魅了される。唇と舌肉、頬の内側で先端を扱き責めているはずなのに、逆に硬度と温度、むせ返るような雄臭が頭に染みついてくる。

(ガチガチで、遅しくて♥ 責めてるはずなのに、こっちが犯されてるみたいに……っ♥)

じゅぶっ♥ じゅぼっ♥ ちゅぷっ♥ じゅぶるっ♥

「れろっ♥ んっぶ♥ んぶうっ♥ ふうっ♥ んぶぶううんっ♥」

(扱ってるだけで、こっちが熱くなってくる♥ 油断できないわ、このまま一気に又いてあげるっ♥)

むしろマルティナとしては、この先の味……下の肉孔で啜え込んだ際の威力も味わいたいが……油断は禁物。早く決着をつけようと唇に力を入れる。

しかしそれ以上は厳しいのか、それともパイフェラに飽きたか、少年も攻勢に出る。

じゅぶっ♥ じゅっぶ♥ じゅぼおっっ♥ ずぼおっっ♥♥

「んむんっ♥ ふむっ♥ ぶぢゆるるっ♥ んんんん〜〜〜っ♥」

びいんっ!

「んぶっ♥♥」

『挑戦者、乳首に愛撫して反撃! パイフェラから逃れられるかあ?!』

激しく胸と頭を上下させて扱っていたところ、乳首を責められてマルティナ動きが止まる。

【へへ……こっちも気持ち良くしてくれたお礼です♪】

(やっぱり……! 耐久力だけじゃない、愛撫が……異様に……っ♥)

少年は精力もさることながら、特筆すべきは愛撫の威力。乳房を触れるなどの焦らしなしにいきなり乳首や陰核に触れているというのに、媚薬じみた快感を与えてくる。

しかもそれが非常に高速。マルティナが肉棒を弾力で激しく一つ扱く間に乳首に無数のソフトタッチが与えられ、責めていたはずが気付けば責められる側へと変化している。

びんっ! びんっ! くりくりくりくり……!

「んんんっ♥ んむんっ♥ ん……っ♥♥」

【ほらほら、どうしました? なんかマルティナさんの方が感じてません? 我慢しないでいいんですよ?】

(ダメ♥ このままじゃ、私が先にイカされるっ?♥ み、認めないわ! 私が競り負けるなんて!)

あわや、乳首責めで絶頂させられるのではないかとさえ思え、マルティナの中に強い焦りが生じる。

前戯で、それもこんな短時間で達するなど自慰以外では有り得ない。しかも競り負けるなど考えられず、負けじと全力で吸い立てる。

ずぞぞぞっ♥ ずぶじゆるるるるううっ♥♥

「んぶっ♥ んっぐ♥ んぶゆううううっ♥♥」

(このデカチンポっ♥ イキなさい♥ 早くうっ♥)

【っ……そろそろ、次の責めが見たい、ですかね……っ!】

「んぶ♥ んっ……ふはあっ♥」

『ここで少年、思わず離れた! 流石に女王のパイフェラは効いたか——?!』

そこまでやって、ようやく少年が離れる。司会は少年が耐えられず退いたと思っているようだが……

マルティナは分かっている。今の攻防は自分が劣勢だったと。

(危なかった……！ ここまでできる子だなんてね……♥)

マルティナに責められていながら、ここまで対抗してくる男は存在しなかった。
相手の精力とテクニックを認め……マルティナが魔力を放つ。

「本気でイクわよ……♥」

デビルモード——魔力によって、フェロモンを増加させた状態だ。

妖艶さを極めたマルティナがフェロモンを全力で放つ。すると男は本能レベルで反応し、思考と肉体を鈍くなり、感度が上がる。

この形態を見ただけで絶頂する者すら居る奥の手。実際、観客の中には遠目に眺めていながら呻いている者もいるが——

しかし、少年は表情を変えない。むしろマルティナが高揚して乳首を勃たせ、じっとり汗ばんでいるのを見て肉根をまた振り返らせる。

【へえ……そんなものもあるんですね】

(これも効いていないの……?)

「その余裕がハッターリかどうか……確かめてあげるっ♥」

八重歯を見せ、嗜虐欲を増した笑みで接近。柔術の要領で相手を押し倒し、マウントをとる。
素早く肉棒を握り、自分のパニースーツの股間部もズラして秘部を露出させると、そこに肉棒を宛がった。

「ウフフ……かなり愉しめたけど……そろそろアタシのエジキになりなさい♥」

『女王、一気に挿入で勝負を決める気だ——！』

昂ぶる嗜虐欲で口調も若干変化したマルティナが、妖しい笑みと共に手を上げてフィニッシュ宣言。
しかし少年は一切動じない。最大の武器である肉壺相手に、真正面から立ち向かうつもりだ。

【いよいよ そのオマンコが味わえるんですね……せいぜい堪能させてくださいよ！

あ、でもこのチンポで随ちなかった人はいないんで、そこだけ気を付けてくださいね♪】

「そんな大口叩いて、吠え面かいても知らないわよお♥」

互いに挑発し合い——マルティナが腰を落とし、一気に騎乗位挿入。

「そおー……れっ♥」

ずぼおおっ♥♥

「んうううううっ♥♥」

少年の愛撫と、何よりマルティナ自身の興奮で濡れそぼった牝肉。名器としての素質もあり、焦らす必要なく巨大な肉根が深々と突き刺さる。

上に乗る、自分のペースでの挿入。それはマルティナを有利にするはずだったが……逆にマルティナの方が喘ぎを上げ、ビクンと仰け反らされる。

巨根はサイズ相応の威力であり、一瞬で肉壺が押し広げられる。下手をすれば白目を剥きかねない衝撃だ。

(スゴいっ♥ ハッターなんかじゃない……挿れただけでこんなに感じるなんて♥)

【おお……濡れてるのにギッチギチに締めてくる、最高のオマンコですね。でもこれじゃまだまだイケませんよ！】

「流石ね……なら、これはどうかしらっ♥」

相手が強ければ強いほど、感じれば感じるほどマルティナも燃え上がる。

S字を描くように腰をくねらせつつ上下し、激しくもねっとりと雄に絡み付く肉壺扱きを繰り返す。

ずぷっ♥ じゅぱんっ♥ じゅぷっじゅぷっじゅぷっじゅぷっ♥

【っ……いい具合ですよ。ついでに子宮も味わいたいですねっ！】

ずばあんっ！

「ふふっ♥ 子宮に当てようとしてるの？ でも、させないわよ♥ ただ大きいだけじゃ、アタシの子宮は突かせないわよ♥」

少年も下から突き上げて強い快感を送り、更に子宮を狙ってくる。本来なら少年のものが入れれば簡単に子宮を突けるだろうが、マルティナが根本まで挿れさせず、更に子宮を引き上げることで触れさせない。

【なら、こういうのはどうです？】

目当ての子宮を突かせないことで、更にペースを掴む……はずが、少年は笑みを見せ、直後に肉棒が脈打つ。

脈動は決して射精が近付いたことによるものではない。むしろ一段と硬さを増し、遅く跳ねることでピストンとは違う角度で膣壁を刺激してくる。

(な、なんなの、この動きっ？ でも、少しかき回されたくらいで——)

ずぐりゅっ！

「んあっ?!♥♥」

大したことはないと思えた動き。しかし脈動が陰核の内側……牝の急所を力強く叩いた。

このような技は受けた経験が全くないゆえに抵抗できず、刺激の威力も角度も的確ゆえに防ぎ切れない。

ほぼ強制的に発情度合を高められ、それが膣奥にも響いて子宮の守りを弱めさせられる。

【マルティナさんもこれは凌げないようですね……さあ、そろそろ子宮をいただきますっ！】

「あ♥♥ ウソ♥♥ これ♥♥ ダメ……………♥♥」

ごづうんっ！！

「んおおおおおおっ♥♥」

胎の底からゾクゾクと甘い電流が奔る。腰と下腹部の踏ん張りが効かなくなり、喘ぎが漏れ——

ついに子宮が降下。いくら淫乱女王マルティナといえど、むしろ最強を誇ったからこそ、ここは鍛えられておらず……巨根に打ち抜かれ、激しく悶絶。

絶頂が近づくのを感じる、強烈な大ダメージを負わされてしまう。

【はは、ぷっくりしてて可愛い子宮ですね♪ ……どうです、子宮で味わうこのチンポは？】

『これは……まさか女王の子宮に当たったか？ あの責め責めの笑顔が快樂に歪む——！』

「アタシの子宮に届くなんて♥♥ ひ、久々に、効いたわ……ここまで追い詰められたの、久々よおっ♥♥」

与えられる快樂に涙腺が緩む。しかし涙を滲ませ、快樂に染まりながらもマルティナは腰使いを加速させる。

「気に入ったわ、このチンポっ♥♥ 大きくて硬くて、最高よっ♥♥ アタシのペットにしてあげるっ♥♥」

【っ?!】

『女王の猛攻！ 追い詰められてもその強さは変わらない！ 果たして、先にイクのはどちらか——?!』

ここにきて、マルティナは自身が覚醒するのを感じる。

かつてない強敵と危機。それに追い詰められ、天性の淫乱さが牝肉を成長させているのだ。

「んふう——っ♥♥ んふうう——っ♥♥」

【はは、ムリしなくていいですよ？ 締め付けは更に良くなってますけど……そろそろイキそうでしょうか？】

「くふううっ♥♥ い、今更、媚びても無駄よっ♥♥ 早く♥♥ ペットに♥♥ 奉仕奴隷になりなさいっ♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！